

独立行政法人国立病院機構 附属看護（助産）学校
令和7年度 入学者選抜試験問題

国 語

実施日時：令和7年1月21日（火） 9：00～9：50

*下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記2つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2項目の全てに記入またはマークする。
 - ・受験番号欄 上欄に受験番号を左詰めで記入し、下欄にマークする。
 - ・氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を左詰めで記入する。

— 開始後 —

1. 問題は2ページから20ページまでの各ページに印刷されており、第1問～第2問の2題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答は全て解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

1

と表示のある問いに対して2と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号1の解答欄②をマークする。

〈例〉

	解 答 欄				
	1	2	3	4	5
1	①	●	③	④	⑤

3. マークする際はHBの鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後の途中退室はできない。

受験番号					

※左詰めで記入する

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

私たちの仕事のなかには、いつも決まったやり方で行われる作業が多くあります。これらは、同じ行動の反復や単純な(ア)ブンキで実現できるものですから、一度手法を決めてしまえば、そのたびに考える必要はありません。その結果としてプログラミング思考は効率を高め、時間と労力を生みます。その余裕を新しいアイデアを考えたり、新しい方法にチャレンジしたりするのに使うというのはとても魅力的なことです。

この意味で、できる限り労力を減らすことは悪ではありません。

と、こんな主張をされても、人間は機械と違って、気持ちややる気によって行動が日々変動するということ事実を無視できませんよね。ですから、多くの方は、「※演算装置だなんて簡単に割り切れることはできない」とやや悲観的な感想を抱くかもしれません。

確かに、気持ちを無理に抑え込もうとしたり、やる気をなんとか引き出そうとしても、なかなかうまくいくものではありません。しかし、だからといって、人が変動する気持ちややる気にいつも引きずられてしまうというのは、単純化しすぎた見方です。

感情や動機づけがあるとしても、それは人にあらかじめ備わった豊かな情報処理の一側面です。日本の認知科学に※黎明(れいめい)をもたらした戸田正直教授は、感情が生存のために備わった重要な機能だということを主張しました。洒落(しやれ)っ気のある戸田先生は、生存のために感情が必要な理由を「茸喰(きのこぐ)いロボット」の寓話でわかりやすく説明しています。

この寓話では、未知の惑星でキノコを食べながら生きる架空のロボットが備えなければならない機能はどんなものか？ という問いに次々と答えることを通して、ヒトを含む知的な生命体に感情が不可欠であることを説明しました。この感情理論は、アージ理論と呼ばれ、感情には理性的な判断を邪魔する厄介な側面があるものの、危険の回避や種々の判断に欠かせないものであることが主張されています。

(A)このことを知っているといたいいくとは大違いです。生存のための感情という見方ができれば人が仕事や学習をするとき、「人間らしい変動も考慮したうえで、うまく立ち回ればよいではないか」というように、見え方が少し変わります。人生には一方で喜びや楽しみがあるので、その反面、一時的に落ち込むのもやる気が出ないというのもやむを得ないことだと思えてきませんか。

感情の浮き沈みがあることも、やる気が出たり出なかったりすることも、事実として受け入れてしまえば、それらも含めて、全体としてうまくいくよう工夫していくというのが「しくむ私」の発想です。《I》

「どうしてやる気が出ないんだろう」という答えの出ない問いを考えるのをやめ、「やる気の出ない自分だけど、うまくやるにはどうしたらいいだろう」と考えるということ。そうやって思考の性質を切り替えるのです。自分自身を原因と結果をつなぐ実体として扱い、対象化して操作していく体感(ア)は、※RPGで主人公を(イ)ボウケンに向かわせるときの感覚に近いものがあるかもしれません。

RPGは、主人公をどのように動かしていけば、目の前のクエストをクリアできるのかという思考で進めていきますよね。(a)、主人公の状態がいつも万全とは限りませんから、気力や体力が減っているようなときでも、手持ちの技術や道具を振り返り、攻略のための手順の組み合わせや順

序を考えて、効率的に進めていこうとするはずだ。

主人公の能力はすぐには変わりませんが、装備やパーティの組み合わせを変えることで、直ちに対処能力の実効値が格段に高くなります。こうした成果を首尾よく納めるには、自分を含めて道具として扱う一種の他人（ウ）ギョウギ的な捉え方が肝要です。

気持ちややる気が万全ではないときもあるでしょう。しかしそれは事実よくあることだと受け入れて、そんななかでもうまくいくように工夫すればよいことです。そうすれば、自分自身とそれを取り巻く環境をほどよく離れた距離から俯瞰し、普段よりも（甲）に自分の行動をデザインすることができそうです。

これが、「自分自身のことと一種の演算装置として考える」という流儀です。

自分自身のことを演算装置として捉えようと、資源（リソース）の配分という観点から、仕事や学習を捉えることができるようになります。

通常、私たちは何かを生み出すために消費される物質を指して資源と呼んでいます。それに対して、ここでは、思考を巡らしたり何か物事を行ったりするのにどうしても必要になる力のことを指します。《2》

実際に何かを引き起こしたことに対応する「仕事量」とは違って、まだ行われていないことも含むので、何か行動を起こす可能性を持った潜在的な力といえます。

ここでのリソースは、人間のフィジカル・リソース（肉体資源）も、メンタル・リソース（精神資源）も共に含んでいます。特に、今回扱っているのは、プログラミング思考ですから、主にメンタル・リソースについて見ていくことにします（以降、メンタル・リソースを単にリソースと呼びます）。

といっても、精神論に頼るということではありません。あくまで手順を効率よくしていくという観点で考えていきます。

人が持つリソースは有限です。もしリソースが無尽蔵なら、多少の無駄は出しても、それこそ（乙）使って素晴らしい成果を出せばよい、という結論を下して議論は終えられます。

（b）実際には、肉体労働で次第に疲れてくると同じように、頭脳労働をすれば脳もくたびれてきます。だからこそ、リソースをうまく配分して、効率的に仕事を進めたいと考えるわけです。そうすることで、同じリソースでも、より多くの仕事をこなす工夫が始まります。

これとは対照的に、能力や才能があるから仕事ができるのだ、という考え方をしてはいませんか。この考え方は、うまくいっているうちはいいのですが、ひとたび仕事に滞りだすと途端に困ってしまいます。《3》それは、仕事に順調にいかないことが、その人の能力不足の証明になってしまうからです。

一方、ここでお勧めするリソース配分という見方は、現時点で仕事ができているかどうか問われるのはもちろんですが、むしろ将来へ向けた計画という面に目を向けさせてくれます。たとえば仕事に滞っていても、リソースの配分次第で改善できるかもしれないのです。自ずとその工夫を

考え、実行するように自分自身を仕向けることができます。

リソースの効率的な配分には現在に至るまで長年開発されてきた、※アルゴリズムを適用することもできます。そういう理由でも、リソースという観点は、組み合わせや順序を考えるプログラミング思考の勘所になります。

世の中には、「やる気があればなんともなる」という神話めいた話があるようです。これは、リソースが無限にあるという錯覚によるものですが、実際にはそうはなりません。脳内物質という物理的な実体を持つリソースが、無限だということはあり得ません。ですから、「やる気があればなんともなる」といった(エ)シンコウは潔く捨て、どうすればうまくリソースを配分できるのかを考えたほうがよいでしょう。

リソースの配分をベースに考えると、感情の起伏ややる気の減退にあまり左右されず、日々の仕事を進められるようになります。《4》感情の起伏ややる気の減退によって、使えるリソースが限られてしまっているときに、それに応じたリソースの配分ができるようになるということです。落ち込んだときも意欲が湧かないときも、リソースの配分という観点から、最小限の労力で仕事をすることによって一つずつタスクを減らしていきます。

△ 中略 △

普段の仕事にも、リソース管理の考え方は応用できます。たとえば仕事が終わらなくても、そこで必要なのは落胆や悲観ではなく、リソースの再配分です。この事実さえ(オ)ハイクしていれば、不必要に気負ってくだびれることはありません。ただ愚直に残りのリソースで最大限の効果を発揮するために工夫を凝らせばよいのです。

仕事に同じ二時間をかけるとしても、自分のことをリソースが限られた演算装置だと思えば、やり方を工夫できます。つまり、どのように自分の振る舞いをしくんでいくかに切り替えてみます。

もし、リソースがたっぷりあるなら、柔軟な思考が求められる仕事をして、新しい発想を探索するのがいいかもしれません。反対に、リソースが枯渇寸前なら、新しいことに手をつけるよりは、X。

自分を原因と結果をつなぐ実体として据えることで編み出された手順の工夫が妥当なものであるかどうかは、実際にその手順がうまく機能するかどうかで判断できます。《5》こういうと場当たり的なようにも考えられますが、ヒトの知性が環境との関わりという経験から構成されていくことを踏まえれば、それには実際的な確からしさがあります。

こうした考え方は、※エルンスト・フォン・グレーザーズフェルド博士によって理論化され、知のラディカル構成主義として知られています。彼の哲学によれば、生命体が有する知性は、環境に確かに変化を及ぼせるか否かという実行可能性(viability)によって基礎づけられるといいます。基礎づけというのは、哲学用語で根拠がどこにあるかを論理的に特定することを指します。

(c)、この考え方は、実際にあなた(と道具の組み合わせ)が周りの環境を動かせるという事実によって、手順の工夫の妥当性は確かめられ、そうした具体的な「しくむ私」と環境との関係性についての知見が蓄積されたものこそ人間の知性だということです。

環境に開かれていることを特徴とする、この現代的な知能観は、初めはとっつきにくいかもしれませんが、現実の生活空間での私たちの振る舞い

を思い起こせば、納得できるところも多いのではないでしょうか。もし、このような内容に興味があるなら、人間ならではの学問を追究し、生の哲学者とも呼ばれた※デイルタイなどの書籍に触れるのをお勧めします。

さて、一度うまくいった手順でも、それがずっと続くとは限りません。

状況は常に移り変わっていますから、リソースと自分を取り巻く環境との関係において最適なものを選ぶのが理想的です。繰り返しによって処理のリソースを削減できるようになれば、その応用として、再配分もできるようになるでしょう。リソースの配分をあらかじめ決めておくのに慣れたところ、今度は時間経過のなかで配分の計画をし直すということも目指してみよう。

これは、様々な分野で一流の人たち（適応的熟達者）が行っていることです。初めは仕事の全体像がつかめず、何もかも一生懸命取り組みがちです。でも、例えばまずは全体の八割程度を作って上司と状況を確認することが大事であることや、どんな形でも納期は守らなくてはならないといった仕事の勘所がわかってくるようになれば、そこにリソースを集中するように再度計画を立てられます。領域によって特色はありますが、^Bリソースの有効活用という面では、どの人にも共通しています。

こうした発想の習慣化は、私たちの仕事の進め方をみるみる変えていきます。まず普段から仕事全体として効率よく進んでいるかに気を配るようになります。さらにこれが身につけば、さほど意識しなくても、リソースの配分は適切かを適宜チェックしながら仕事の優先順位や割り振りを決めていけるようになるのです。

（出典 野村亮太著『プログラミング思考のレッスン』集英社新書）

《注》

※演算装置…コンピュータの構成要素のひとつで、論理演算や四則演算などの演算をおこなう装置。

※黎明…新しい事柄が始まろうとすること。また、その時。

※RPG…ゲームにストーリー性があり、プレイヤーの演じるキャラクターの成長を特徴とするゲームジャンル。

※アルゴリズム…問題を解決したり目標を達成したりするための計算方法や処理方法。

※エルンスト・フォン・グレーザーズフェルド博士…ドイツ出身の哲学者・心理学者。

※デイルタイ…ヴィルヘルム・クリスティアン・ルートヴィヒ・デイルタイ。ドイツの哲学者・心理学者・思想家。

問一 傍線部(ア)ゝ(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①ゝ⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

1

、(イ)

2

、(ウ)

3

、(エ)

4

、(オ)

5

(配点 各2点)

(ア)	ブンキ	①	気	②	機	③	岐	④	期	⑤	着
(イ)	ボウケン	①	望	②	暴	③	帽	④	防	⑤	冒
(ウ)	ギョウギ	①	儀	②	義	③	議	④	偽	⑤	擬
(エ)	シンコウ	①	講	②	公	③	仰	④	候	⑤	功
(オ)	ハアク	①	派	②	把	③	破	④	波	⑤	刃

問二 本文中の(a)ゝ(c)に入る語として最も適当なものを、次の①ゝ⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a)

6

、(b)

7

、(c)

8

(配点 各2点)

- ① しかし ② つまり ③ それとも ④ しかも ⑤ なぜなら

問三 空欄（甲）（乙）に入るものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）

9

（乙）

10

（配点 各4点）

（甲）

① 突発的

② 意図的

③ 積極的

④ 客観的

⑤ 感傷的

（乙）

① 手塩にかけて

② 肝に銘じて

③ 脱兎のごとく

④ 本腰を入れて

⑤ 湯水のように

問四 空欄

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

11

（配点 4点）

- ① 注意する箇所が多い複雑な作業をしたほうがよいでしょう
- ② 注意すべき範囲が狭い単純作業をしたほうがよいでしょう
- ③ 注意喚起が多い範囲で単純作業をしたほうがよいでしょう
- ④ 注視する範囲が広い複雑な作業をしたほうがよいでしょう
- ⑤ 注視すべき範囲が多い単純作業をしたほうがよいでしょう

問五 次の一文は、本文中の《1》《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

12

(配点 5点)

といってもこれは、意志の力が強まるという意味ではありません。

- ① 《1》 ② 《2》 ③ 《3》 ④ 《4》 ⑤ 《5》

問六 傍線部A「このことを知っているといたないとは大違いです。」とあるが、その内容として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 13

(配点 5点)

- ① 感情が理性的な判断を妨げる一方で、危険の回避や種々の判断に欠かせないものであることを知っていれば、やる気が出ない場合でも、やる気が出ない原因や解決法を考え、理由の探求に繋げることができる。
- ② 感情は危険を避けるために不可欠なものであり、理性的な判断をする際に必要な機能であることを知っていれば、感情の起伏に影響を受けることなく、逆境を乗り越えようと楽観的な発想をすることができる。
- ③ 感情は危険の回避や様々な判断に必要な機能である反面、理性的な判断を阻害するものであることを知っていれば、やる気が出ないことも仕方がない事実として受け止め、原因の追及に努めることができる。
- ④ 感情は仕事を理性的にコントロールする側面があり、危険を回避するために欠かせないものであることを知っていれば、気持ちの浮き沈みに左右されることなく、自分の気持ちをうまく制御することができる。
- ⑤ 感情は理性的な判断を阻害することがあるが、危険の回避や判断に不可欠であり、生存の動因として働くものであることを知っていれば、感情の変動にも適応し、全体がうまくいくように工夫することができる。

問七 傍線部B「リソースの有効活用」を行うことで、どのような結果が生まれるか。その内容として合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

14

(配点 6点)

- ① 仕事の進行の状況に応じて、リソースの再配分を行うことができるようになると、普段から仕事の効率化が進んでいるかを意識するようになり、さらにそれが定着すると、自ずとリソースの配分が適切かを確認しながら仕事の優先順位や割り振りの決定ができるようになる。
- ② 慣れないうちにはリソースの配分を先に決めて処理し、慣れてくると進捗ごとに再度計画を立てられるようになることで、仕事が進んでいくかに気を配り、それが身につくと、自然とリソースの状況を確認しながら仕事の優先度や振り分けを決めていけるようになる。
- ③ リソースの配分を進捗によって柔軟に変えることができるようになると、仕事の進み方に変化が起こって、効率化に気を配るようになり、それが習慣化すると無意識のうちにリソースが適切な配分かを適宜確認しながら、仕事の優先順位や振り分けの決定が行えるようになる。
- ④ 仕事の勘所がわかり、あらかじめリソースの配分を決めておくようになると、仕事の効率維持できているかを意識するようになり、それが身につけば、リソースの配分を進捗の状況に応じて適宜確認しながら、全ての仕事に対して全力で取り組むことができるようになる。
- ⑤ 初めはリソースの再配分を考えるのは難しいが、進捗の状況ごとにリソースの配分の見直しができるようになると、仕事の効率に気を配ることができ、それが身につくと自然とリソースの配分が適切か随時チェックしつつ、仕事の優先順位や分配を決定していけるようになる。

問八 本文の内容について説明した次のA～Eのうち、合致するものはいくつあるか。適切な数を、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

15

(配点 6点)

A 感情や動機づけは人間に本来備わっている情報処理の一部分であり、常に行動に影響を与えるわけではないため、機械のように単純な作業を繰り返すことで、人間はやる気に左右されず、新しい挑戦や新しいアイデアを生み出す余裕を持つことができる。

B RPGにおいて、主人公の状態が万全でないときも、効率的な戦略の手順を考え、技術や道具、パーティの組み合わせを変えることで対処能力を即座に高められるように、距離を置いて自分を道具として扱うことが目的を達成するためには肝心である。

C 仕事が順調にいつているのは自分の能力や才能の証明である、という考え方もあるが、実際には脳が疲れてくると、効率的に仕事を行うためにリソースの配分を考え、仕事の進め方を自ずと工夫するようになるためにうまくいつているのである。

D 「やる気があればなんとでもなる」というリソースが限られていることを無視した信念は現実的ではなく、リソースの効率的な配分を考えることで、意欲が湧かないときも、リソースの配分という観点で、最大限の労力の作業でタスクを減らしていける。

E 感情の浮き沈みがあるのは仕方がないことと受け入れ、自分はリソースが有限な演算装置だと認識すれば、たとえリソースが少なくなったときにも最大限の効果が出るような工夫を凝らし、どういう行動をすればいいか思考を切り替えることが可能になる。

- ① 一つ ② 二つ ③ 三つ ④ 四つ ⑤ 五つ

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

多くの場合、私たちが他者を助けるのは「他者のため」だけでなく「自己のため」でもある。大人は幼い子供よりも共感による不快な情動と距離を取り、コントロールできるので、そういう意味での利己的動機は弱くなるが、一方では、他者援助による称賛や自尊心など、別の意味で利己的欲望が強くなるし、むしろ子供のほうが②ジュンスイに他者を助けているのかもしれない。

サルやネズミは目の前で他者が苦しんでいると、その原因となる行動をやめるのだが、それはA自己防衛的利他行動であり、共感によって生じた自分の不快な情動に耐え切れず、その不快感を解消するために行動をやめているにすぎない。しかし、もっと積極的に他者に対して気遣い、慰めるような行動、助けるような行動を取る動物もいる。

※ドウ・ヴァールの著書から例を挙げてみよう。

動物研究の草分けであるコーツは、幼いチンパンジーのヨニを愛情深く育てていた。ある日、コーツは泣き真似をして、目を閉じて涙を流すふりをする。ヨニは自分のしている遊びをただちにやめ、興奮して毛を逆立てながら、急いで駆け寄った。そして、コーツのまわりをせわしなく走り、コーツの顔をじつと見て、手のひらで優しくコーツの顎を包み、指でそつと顔に触れたのだ。

この事例は明らかに同情を示している。ドウ・ヴァールによれば、「共感とは、他者についての情報を集めるプロセスだ。対照的に、同情とは、他者に対する気遣いと、他者の①キョウグウを改善したいという願望を反映している」(『共感の時代へ』)。共感は無意識的で、他者を助けるとはかぎらないが、同情は意識的に他者を助けたいと思う段階、ということになる。①

チンパンジー以上に共感レベルが高く、同情による利他的行動を示すのがボノボだ。たとえば、動物園の壁にぶつかって気絶した鳥を見つけたボノボが、鳥を拾い上げ、木のでっぺんに登り、空中へ放り出してやった、という例がある。鳥が飛び立てるように、助けようとしたのだろう。ボノボのような類人猿は、同情するだけでなく、Xのある高度な援助行動ができるのだ。

他にもB同情を示す動物の例は多い。最も身近なのは、飼い犬の慰める行為だ。苦しんだり悲しんだりする家族に、飼い犬はうろたえ、飼い主のまわりをうろうろし、気遣わしように頭を飼い主の膝の上に載せてくる。こんな経験をした人は少なくないだろう。

ただ、慰めるという行為には、共感して不安になった自分の心を安心させたい、という自己防衛的な動機もある。幼い子供が苦しんでいる母親を見て思わず抱きついてしまうのは、母親を慰めているようにも見えるが、自分の苦しみを癒してもらいたい、という気持ちもあるだろう。それは慰めるという利他的行為ではあるが、なぜ相手が苦しんでいるのか、どうしてあげればよいのか、という理解には至っていないのだ。

この段階では、他者の身になってみる、他者の視点で考えられるわけではないので、厳密に言うと、共感はあるが同情が生じているとは言えないかもしれない。しかし、鳥を助けたボノボの行動は、他者の視点に立った援助行動であり、それは完全に発達した同情と見ることができる。これは

チンパンジーにも同じことが言える。どうやら、

Y

人間の赤ちゃんにも早くから共感が生じているのだが、他者の視点に立つことはできない。一歳になると鏡に映った自分の姿に微笑んだり、ペタ触れたりするようになるが、それが自分だとは理解していない。これは多くの動物も同じだが、要するに、鏡に映っているのは他者なのだ。

しかし二歳を過ぎると、鏡に映っているのは自分だと気づけるようになるし、それを証明する簡単な実験もある。

たとえば、子供の顔にわずかの口紅をつけておくと、鏡を見たとき、子供は自分についた口紅に手を触れる。(a)、鏡に映った口紅が自分についているものだとして認識しているのだ。これはマークテストという実験だが、二歳児はこのテストに合格するようになる。自己鏡映像認知とも呼ばれるこの認識は、自己像を形成し、自己意識の発達を意味するものであり、他者の視点に立つて自分を見ることができるようになったことを示している。

《2》事実、マークテストに合格した子供たちは、「僕が」「私に」という言葉をたくさん使うようになり、困ったり苦しんでいる人を見ると、手助けするようなふるまいが見られるようになる。たとえば、ぬいぐるみが破れて泣いている子には、別のぬいぐるみを持って行ったり、スプーンが折れて悲しそうにしている大人に、別のスプーンを渡したりするのである。

- a 共感だけなら、ほとんどの哺乳類に生じるだろう。
- b この区別ができなければ、泣いている子を見て泣きだす赤ちゃんと同じだ。心的分離があるからこそ、他人の悲しみに対して同情し、何とかしてあげたいと思うのである。
- c 私たちは他者の悲しみや怒り、痛みを目にすると、同じような感情が湧き上がるものであり、神経画像で見ても脳が同じように活性化するように様子捉えることができる。
- d このことから、利他的行為には他者の視点、自己と他者の区別が必要であることがわかる。
- e ここまでは哺乳類に共通するメカニズムだが、人間はさらに、他人の状態と自分の状態を切り離す「心的分離」があるため、他人の悲しみと自分の悲しみを区別できる。

ドウ・ヴァールによれば、自己鏡映像認知のできる種は人間に限らず、視点取得（他者の視点に立てる）と他者援助の能力を持つ。たとえば、イルカの脳が大きく、頭のいい動物であることは、よく知られているが、自己鏡映像認知ができるなら、共感するだけでなく、利他的行為をする可能性も高いはずだ。

ニューヨーク水族館にいるイルカのプレスリーは、人間が化粧台の前でやるように、鏡の前で何度も何度も回転し、自分の姿をチェックしている

ようだったという話がある。また、二頭のイルカの身体に絵の具で印をつけたところ、普段よりも長く鏡の近くにいて、映った姿を念入りに調べていた、という報告もある。これはマークテストに合格した証と言える。したがって、イルカが利他的行為を行ったとしても、理論的に不思議はない。フロリダ州でイルカを捕獲するため、バンドウイルカの群れのそばの水中でダイナマイトを爆発させたときの出来事だが、気絶したイルカが一頭、水面上に浮かび上がったとき、二頭のイルカが助けに来たという。気絶したイルカが呼吸できるように、水面上に押し上げたのである。その間、群れ全体が近くにとどまり、逃げ出しもせず、仲間が回復するまで待っていた。《3》

これはクジラも同じで、漁師の船と傷ついた仲間の間に割り込んだり、船を（ウ）テンプクさせたりした事例は、古くから数多く報告されている。また、マッコウクジラの群れが見つかったら、一頭だけ撃てば残りは簡単に捕獲できるという。仲間が捕鯨者に撃たれると、残りのクジラは船や傷ついた仲間を取り囲むため、次々と狙い撃ちにできるからだ。逃げなければ自分が殺されるのに、クジラたちは仲間を置いて逃げるようなことはしないのである。

ゾウも仲間意識の高い動物として有名だ。あるゾウが密漁者に撃たれて倒れると、家族のゾウが立たせようとしたり、口に餌を詰め込もうとした、という話がある。この時、家族のゾウは大声で叫び、排尿し、尾を立てる、耳を拡げるなどのストレス信号を示しており、この興奮した反応は情動の伝染を示すものだと考えられる。また、赤ちゃんゾウが穴に落ちて這い出せないでいると、まわりのゾウの一団は即座に興奮状態になり、二頭のゾウが鼻や牙で子ゾウを助け出そうとした、という例もある。

ちなみに、ゾウもやはり自己鏡映像認知はできるらしい。ゾウの目の上にバツ印を描いてから巨大な鏡を与えると、ゾウは鏡に近づき、長い鼻で自分の身体に描かれたバツ印に何度も触れたからである。無論、あらゆるゾウが常にこうしたマークテストに合格するわけではないが、しかし、こうした事例が確認された以上、ゾウに自己鏡映像認知ができる可能性は否定できない。

《4》すでに見てきたように、多くの哺乳類は仲間の苦しみを感じ取っており、そこには共感が生じている。サルやイルカ、ゾウなど、一部の哺乳類には、共感を示すような動揺、興奮の直後に、仲間を助けようとする利他的行動さえ見ることができるといえる。

こうした主張に対して、共感相手の内面を想像し、推論する高度な知性が必要ではないか、という反論も少なくない。実際に共感しているのではなく、そう見えるだけではないのか、というのである。これに対してドウ・ヴァールは、共感や思いやりの起源は、高度な想像力や相手の立場を意識的に思い起こす力ではない、と述べている。

一九九〇年代初期までは、共感は大脳で制御される複雑な技能だと思われていた。つまり、他者の視点に立って相手の内面を想像し、推論する力がなければ、相手の感情を理解することなど不可能であり、当然、人間以外の動物にそのような能力などない、と考えられていたのだ。

しかし現在では、その過程はもっと単純で自動化されたものであることがわかっていく。つまり、自分が相手の立場だったらどのように感じるか、

という脳内での周到なシミュレーションに基づいて共感が起きる、と考えられていたのだが、「実際には共感とは、顔や声や情動がかかわる無意識の身体的つながりから生じる。人間は自分で決めて共感するのではない。自然に共感するようにできているのだ」（『道徳性の起源』）。

動物が興奮状態を示したり、利他的行為を示したからといって、共感が生じていることの証明にはならないのではないか、という疑問を持つ人もいるだろう。（b）、近年、脳科学におけるミラーニューロンの発見が、共感が生じている証拠としてにわかに注目を浴びている。

《5》ミラーニューロンとは、行動している時、行動しているのを見ている時に活性化される神経細胞のことで、相手の動作を見ているだけで、その動作をしているかのような反応を示すという特質がある。アイスを食べているサルを見ているサルの脳内では、アイスを食べているサルと同じように神経細胞が活性化するのだ。したがって、苦しんでいるサルを見ているサルの脳を調べれば、おそらく苦しんでいる時と同じような神経細胞の反応が見られることになる。つまり、同じ感情が生じている可能性が高いため、これは共感が生じている有力な証拠となり得るのだ。

（出典 山竹伸二著『共感の正体』河出書房新社）

《注》

※ドウ・ヴァール：オランダ生まれの心理学者・動物行動学者であるフランス・ドウ・ヴァールのこと。著書に『チンパンジーの政治学』『共感の時代へ』『道徳性の起源』などがある。

問一 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

16

、(イ)

17

、(ウ)

18

(配点 各2点)

(ア) ジュン|スイ|

- ① スイ|ソウ|楽部が有名な学校だ。
- ② 病気でスイ|ジャク|する。
- ③ 本の要点をバス|スイ|した。
- ④ 速やかに任務をスイ|コウ|した。
- ⑤ 新しいスイ|ハン|器を買った。

(イ) キョウ|ウ|グウ

- ① 母は数学のキョウ|ウ|シだった。
- ② キョウ|ウ|フウが吹いている。
- ③ キョウ|ウ|アクな犯罪が増加している。
- ④ ソツ|キョウ|ウで歌をつくる。
- ⑤ コツ|キョウ|ウ沿いの村に住んでいる。

(ウ) テン|プ|ク

- ① テン|コウ|の急変にそなえる。
- ② テン|キン|で東京に引越した。
- ③ 風邪のテン|ケイ|的な症状だ。
- ④ 絵をテン|ラン|会に出品した。
- ⑤ 食品のテン|カ|物を気にする。

問二 本文中の（ a ） 、 （ b ） に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ） 、 （ b ）

（配点 各2点）

- ① しかし ② さらに ③ つまり ④ また ⑤ ただし

問三 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① 戦闘力 ② 説得力 ③ 統率力 ④ 記憶力 ⑤ 洞察力

問四 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① 脳が大きな哺乳類は、他者の感情の理解はできるが、利他的な動機にもとづいた適切な行動はできないらしい
② 大きな脳を持つ哺乳類は、他者の視点に立って相手の心を理解し、同情による適切な利他的行動ができるらしい
③ 大きい脳をそなえた哺乳類は、他者の置かれている立場を理解し感情は共有するが、適切な行動は難しいらしい
④ 大脳を持っている哺乳類は、自己防衛的な共感ではなく同情をともなった利他的行動をとる能力はないらしい
⑤ 脳が大きい哺乳類は、自分の心を落ち着かせたいという自己防衛的な動機で共感をともなう行動をするらしい

問五 次の一文は、本文中の《1》《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

23

(配点 5点)

他者への気遣いは、こうした自己認識にともなって生じてくる。

- ① 《1》
② 《2》
③ 《3》
④ 《4》
⑤ 《5》

問六 本文の 中の a と e の各文を意味が通るように並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

24

(配点 5点)

- ⑤ e | d | c | a | b
④ d | c | a | b | e
③ d | a | c | e | b
② b | d | e | a | c
① b | c | d | a | e

問七 傍線部A「自己防衛的利他行動」とあるが、その内容として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答番号は

25

(配点 6点)

- ① 「自己防衛的利他行動」は、大人は共感による不快な情動をコントロールできるため、利己的動機は弱くなる一方で、他者援助による称賛や自尊心の欲望が強くなるため、すべてが「他者のため」の行動であるとはいえない。
- ② 「自己防衛的利他行動」は、子どもが他者を助けるとき、他者援助による称賛や自尊心を求めることから、子どものほうが痛みを強く感じ、自分の苦しみを避けたいという自己中心的理由にもとづく行動である。
- ③ 「自己防衛的利他行動」は、大人は自己防衛的利他行動を取らないため、他者を助ける行動が少ないことから、この行動の目的は自分を犠牲にして仲間を助けようという「他者のため」の感情から起こる行動である。
- ④ 「自己防衛的利他行動」は、サルやネズミが他者の苦しみに共感し、その不快感を解消するために自分の行動をやめるように、自分も苦しみを味わいたくないという自己中心的理由から相手を助けようとするものである。
- ⑤ 「自己防衛的利他行動」は、人間は子どもの頃から他者援助による称賛や自尊心のためならば、積極的に他者を助けることから、自分や相手に不快感を与えたくないという利己的な気持ちが高まって生まれる行動である。

- ① コーツが育てたチンパンジーはコーツが泣いているふりをしていて、途中で遊びをやめて駆け寄り、コーツの顎を手のひらで包んだり指で触れたりするなど、他者を助けたいという思いによる利他的行動を示す。
- ② ボノボが、壁にぶつかって気絶した鳥を見つけると拾い上げて、木に登って空中へ放り出してあげるとい一例は、鳥が飛び立てるように助けようと考えた完全に発達した同情にもとづく高度な援助行動である。
- ③ ボノボよりチンパンジーは共感レベルが低い、コーツが育てたチンパンジーは、泣き真似をするコーツの顎を包み、指で触れるなどをするように、無意識的に他者を助けたいという共感から行動を起こすことがある。
- ④ 飼い犬は、飼い主が苦しんだり悲しんだりしていると頭を飼い主の膝上に載せたりするような行動をみせるが、これは同情の中に、共感によって生じた不快な情動を解消するための自己防衛的な動機も含まれている。
- ⑤ 苦しんでいる母親を見て抱きつくという行為は、母親を慰めるという利他的行為にも見えるが、相手が苦しんでいる理由や、どのようにしてあげたらよいのかという理解はなく、他者の視点に立った行動ではない。

問九 傍線部C「こうした主張」が指す内容として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答番号は 27

(配点 5点)

- ① イルカ、クジラ、ゾウなどの動物は、自己鏡映像認知能力を持っており、他者の視点を理解し、仲間を助ける行動が観察されていること。
- ② イルカやクジラの一部の哺乳類は、自己鏡映像認知能力は乏しいが、仲間意識が強く、仲間を助ける行動を示す事例が数多くあること。
- ③ 動物の中でも、特に仲間意識が強いイルカやクジラは自己鏡映像認知が可能で、他者に共感する能力を持つことが報告されていること。
- ④ ゾウはイルカやクジラなどの他の動物と異なり、自己鏡映像認知能力は持っていないが、共感を伴って仲間を助ける行動を示したこと。
- ⑤ イルカ、クジラ、ゾウなどの動物は、自己鏡映像認知能力や、共感しているように見える高度な知性を持っている行動が確認されること。

問十 本文の内容について説明した次のA～Eのうち、合致するものはいくつあるか。適切な数を、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答番号は 28

(配点 6点)

- A 幼児期から始まる共感による行動は、自己の不快感を解消するための自己防衛的な側面があるが、成長と共に他者のために行動する能力が育まれ、大人になると他者援助による称賛や自尊心などの利己的欲求が強くなり、利己的動機は弱くなる。
- B サルやネズミは他者が苦しんでいると、原因となっている行動をやめるが、それは自己防衛的利他行動であり、共感によって生じた自分の不快な情動に対処するためであるが、動物の中には相手を気遣い、能動的に助ける行為をするものもある。
- C 人間の赤ちゃんは一歳になると鏡に映る自分の姿に微笑むが、これは赤ちゃんが自分を認識し始めたことを示していて、この鏡に映っているのは自分であると認識することは、自己像を形成する一歩となり、自己意識の発達を示す重要なサインである。
- D 捕獲のためにダイナマイトを爆発させた際に、気絶したイルカを呼吸が可能になるように、他のイルカが水面に浮かび上がるように押し上げたり、穴に落ちた赤ちゃんのゾウを、そばにいたゾウが鼻や牙で助け出そうとしたりする行為は利他的なものである。
- E 一九九〇年代初期までは、共感は大脳で制御される単純な技能によって生じると考えられていたが、ドウ・ヴァールによれば、共感は高度な知性や想像力が必要なものではなく、実際には顔や声や情動がかかわる無意識の身体的つながりから生じると主張している。

- ① 一つ
- ② 二つ
- ③ 三つ
- ④ 四つ
- ⑤ 五つ

独立行政法人国立病院機構 附属看護（助産）学校
令和7年度 入学者選抜試験問題

国語【解答用紙】

受験校		受験番号		フリガナ	
				氏名	

／ 100

第1問（配点50点）

	問一				
	1	2	3	4	5
解答	3	5	1	3	2
配点	2	2	2	2	2

	問二			問三	
	6	7	8	9	10
解答	4	1	2	4	5
配点	2	2	2	4	4

	問四	問五	問六	問七	問八
	11	12	13	14	15
解答	2	4	5	4	3
配点	4	5	5	6	6

第2問（配点50点）

	問一			問二		問三	問四
	16	17	18	19	20	21	22
解答	3	5	2	3	1	5	2
配点	2	2	2	2	2	4	4

	問五	問六	問七	問八	問九	問十
	23	24	25	26	27	28
解答	2	3	1	3	1	2
配点	5	5	6	5	5	6